

## エルフリーデ・ツェルダ氏講演会

「ロマン派以降の文学における人造人間のイメージ」についての報告

嶋田由紀

Elfriede Czurda (1945- )

オーストリアに生まれる。ザルツブルクとパリで美術史・考古学・哲学を学ぶ。1974年博士号取得。1975-76年にグラーツの作家会議事務局長。1981年までリンツの出版社で編集者として働く。以後は、作家としてベルリンとウィーンに在住。オハイオ州立大学をはじめ、さまざまな大学で招待講師として講演。今回は、名古屋市立大学の招聘で来日した。„Die Giftmörderinnen“, „Buchstäblich: Unmenschen“, „Wo bin ich wo ist es“ など、著作多数。

同氏の講演会は、2005年7月1日（金）午後4時半から文学部第7会議室にて開催された。デジタル画像を多数用いながら、文学におけるアンドロイドを共時的事象と対比し（Synchronopse）且つそれらを通時的に概観する講演となった。以下、その概要を記す。

\*

E. T. A. ホフマンの『自動人形』のなかに描かれている「予言するトルコ人形」は、本講演のテーマの中心像である。そもそも自動人形は、17世紀に作られはじめ、18世紀には、見本市や見世物小屋で一つのショーとして展示された。文学に登場するのは、ジャン・パウルの『悪魔の紙挟みから (*Auswahl aus des Teufels Papieren*)』以降である。本講演では、18世紀半ばから20世紀初頭にかけての文学におけるアンドロイドを扱い、どのように「身体は捏造 (Körpererfindungen)」されたかをみていく。その際、これらが、その時代時代の産業発展を反映していることにも注意を払いたい。

産業革命以前における、教会や市庁舎の時計にみられるような計時の機械化が、アンドロイドの歴史への登場を技術的に準備した。というのも、天体時計や定時に動き出す人形など機械仕掛けをたくさん盛り込んだこのような時計の製作は、高度な技術と自然科学に対する深い造詣が要求され、そのような技術をもった時計師こそがアンドロイドの最初の製作者であったからだ。

産業革命が始まるころ、時計師ジャケ・ドロは、絵を描く自動人形、文字を書く人形、オルガンを弾く婦人などを作成し、ヴォーカンソンは、フルート吹きや餌をついばみ消化する家鴨の自動人形（1738）を作成した。興味深いのは、こういった機械を作るかたわら、ドロは永久機関を構想し、ヴォーカンソンは解剖学者と協力して人間を機械で模造する構

想を立てていたことである。彼らのアンドロイドへの予言的イメージは、ケンペレンへと引き継がれ、「チェスを差すトルコ人形」(1769)となった。これは、人間の発声器官を解剖学的なまなざしで研究した末に作成された「しゃべる人形」の副産物として生まれた。ケンペレンのこれら二つの機械はメルツェルに売り渡され、1830年、エドガー・アラン・ポーは、アメリカ巡業中であつたこれらの機械を目にしている。

ラ・メトリの『人間機械論』(1748)、すなわち「人間は機械である」という考えを具現化するようなケンペレンの自動人形について、ジャン・パウルは、『悪魔の紙挟みから』(1789)のなかで社会批判を込めて叙述している。

しかし、1820年に上梓された『巨人』では、機械人間を哲学的に考察し、それがアイデンティティーの問題となるまでに発展している。主人公アルバノは、父からある複雑な機械を受け継ぐ。機械の謎を解決することこそが自己のアイデンティティーを回復することと考えるアルバノは、狂気に陥る危機にまで追い詰められる。図書館員であるショッペは、他の時間リズムの可能性を示唆することで、彼を救おうとするが、アルバノの問題が解決されたとき、彼の狂気はショッペに乗り移る。

この狂気は、E. T. A. ホフマンの『砂男』(1817)のナターナエルにも感染する。自動人形オリンピアに恋した彼には、彼女との距離が重要となってくる。つまり、彼女を遠くから望遠鏡で覗くときには、彼女は生き生きとして見えるが、ひとたび彼女に近づくと、待ち受けているのは狂気か死である。欲望を先送りすること、言い換えれば、機械仕掛けの人間がもつ新しい時間感覚に自らを順応させることが、彼には要求されているのだ。そして、先送りされた欲望は、技術によって満たされるのである。

自動人形が女性に対する男性の欲望を満たすものだとすれば、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』の醜い「怪物」はひとつの例外といえる。この作品の副題が「近代のプロメテウス」となっていることからわかるように、人間の形をしたこの「怪物」はパラケルススの生物学的研究をもとに、人間の死体をつなぎ合わせて作られる。社会の一員となるがために言葉さえ学んだ怪物は、しかし、醜いがゆえに社会から拒絶される。そして、自分と同じほど醜い女性を作ってほしいという望みさえ、創造主であるフランケンシュタインに拒絶され、復讐心から殺人へと走る。これを阻止するため、——これは他の作品にも通じるものだが——フランケンシュタインは自分の創造物を亡き者にしようとする。

ハンリヒ・フォン・クライストは『マリオネット劇場について』(1801)のなかで、自分の身振りを意識しすぎたために、優雅さを失う俳優を描いている。この俳優の身に起こる精神と身体の一一致の喪失、というテーマは、ヴェリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』(1885)に引き継がれている。エドワード卿は、自分の恋人アリシアが、外見の並外れた美しさとはまったく見合わない卑俗な精神をもっている、と科学者メルロ・パークに嘆く。エジソンをモデルに描かれたこの科学者は、それでは、彼女をそっくりそのままコピーして見せようと申し出る。あらゆる最新メディアを搭載した、アリシアの機械的コピー、ハダリーは、すばらしく美しい身体を持ち、かつその内部を覗くことができるという、まさに人間

の欲望を充足させるアンドロイドの理想形を示している。

ホムンクルスもまた、人間の欲望を満たすものとして表象される。ユダヤ教におけるゴーレム伝説によれば、ラビは自分の命令をそのまま実行する召使ゴーレムを土から作り出し、その生死を文字によって決定したという。グスタフ・マイリンクは、この伝説をもとに、『ゴーレム』(1915)を書いた。

カフカの『流刑地にて』に登場する処刑機械は、判決文を罪人の背中に針で刻み込む機械である。この機械は、理想的な社会的身体に人間を裁断するものである。

\*

惜しむらくは、時間の制約上、20世紀以降のアンドロイド像に充分言及されなかったことだ。これを補足する形で、講演会后「かわうち」にて、カスパロフとディープ・ブルー(IBMのコンピュータ)のチェス対決について、話をうかがうことができた。チュルダ氏によれば、カスパロフの敗因は、コンピュータがフェイクを使う可能性を考慮に入れていなかった点によるという。ディープ・ブルーは、対戦中、次の手を打つまで数十分かかったときがあった。これを、カスパロフは、演算のための所要時間とみたが、実は、これは、「思考しているふり」をするコンピュータ側の策略であった。つまり、カスパロフが、コンピュータに人間同様の「かけひき」ができるとは考えてもいなかったことにその敗因があるということだった。